

御晨朝の御和讃（案1日の和讃を除きすべて月に2回使用）

毎月一日（は報恩講の満日中、一月十六日日中に使用）

三朝浄土の大師等 哀愍摂受したまいて

眞実信心すすめしめ 定衆のくらいに帰せしめよ

他力の信心つるひとを うやまいおおきによるこべば

すなわちわが親友ぞと 教主世尊はほめたまう
（正像末〓三時）

如来大悲の恩得は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし

毎月二日（先師会 晨朝）

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば

大小聖人みなながら 如来の弘誓に乗ずなり

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば

すなわち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ
（高僧〓善導）

毎月三日

三塗苦難ながくとじ 旦有自然快樂音

このゆえ安樂となづけたり 無極尊に帰命せよ

十方三世の無量慧 おなじく一如に乗じてぞ

二智円満道平等 摂化随縁不思議なり
（浄土〓讃阿弥陀）

毎月四日

眞実信心つるゆえに すなわち定衆にいりぬれば

補処の弥勒におなじくて 無上覺をさとるなり

智慧の念仏つることは 法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし
（正像末〓三時）

毎月五日

本師道綽禪師は 聖道万行さしおきて

唯有浄土一門を 通入すべきみちととく

縦令一生造悪の 衆聖引接のためにとて

称我名字と願じつつ 若不生者とちかいたり
（高僧〓道綽）

毎月六日

龍樹大師世にいでて 難行易行のみちおしえ

流転輪廻のわれらをば 弘誓のふねにのせたまう

本師龍樹菩薩の おしえをつたえきかんひと

本願こころにかけしめて つねに弥陀を称すべし
（高僧〓龍樹）

毎月七日

本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしえにて

仙経ながくやきすてて 浄土にふかく帰せしめき

本願円頓一乗は 逆悪摂すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくとさとらしむ
（高僧〓曇鸞）

毎月八日

如来興世の本意には 本願眞実ひらきてぞ

難値難見とときたまひ 猶霊瑞華としめしける

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも ひさしき仏とみえたまふ
（浄土〓大經）

毎月九日

弥陀の名号となえつつ 信心まことにつるひとは

憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり

誓願不思議をうたがひて 御名を称する往生は
宮殿のうちに五百歳 むなくすくとぞときたまう
(浄土 冠頭)

毎月十日

弥陀成仏このかたは いまに十劫をへたまえり
法身の光輪きわもなく 世の盲冥をてらすなり

知恵の光明はかりなし 有量の諸相ことごとく
光暎かぶらぬものはなし 真実明に帰命せよ
(浄土 讚阿弥陀)

毎月十一日

恩徳広大釈迦如来 偉提夫人に勅してぞ
光台現国のそのなかに 安樂世界をえらばしむ

大聖おのおのもろともに 凡愚底下のつみひとを
逆悪もらさぬ誓願に 方便引入せしめけり
(浄土 觀經)

毎月十二日

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし
撰取してすてざれば 阿弥陀となすけたてまつる

恒沙塵数の如来は 万行の少善をきらいつつ
名号不思議の信心を ひとしくひとえにすすめたり
(浄土 阿弥陀)

毎月十三日

尽十方の無碍光仏 一心に帰命するをこそ
天親論主のみことには 願作仏心とのべたまう

願作仏の心はこれ 度衆生のこころなり
度衆生の心はこれ 利他真実の信心なり
(高僧 天親)

毎月十四日

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば
大小聖人みなながら 如来の弘誓に乗ずなり

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば
すなわち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ
(高僧 善導)

毎月十五日

弥陀の報土をねがうひと 外儀のすがたはことなりと
本願名号信受して 寤寐にわすることなかれ

極悪深重の衆生は 他の方便さらになし
ひとへに弥陀を称してぞ 浄土にうまるとのべたまう
(高僧 源信)

毎月十六日(本日は三首)

本師上人世にいでて 弘願の一乗ひろめつつ
日本一州ことごとく 浄土の機縁あらわれぬ
智慧光のちからより 本師聖人あらわれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ
曠劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき
本師聖人いませずば このたびむなくすぎなまし
(高僧 源空)

毎月十七日

本師道綽禪師は 聖道万行さしおきて
唯有浄土一門を 通入すべきみちととく

縦令一生造悪の 衆生引接のためにとて
称我名字と願じつつ 若不生者とちかいたり
(高僧 道綽)

毎月十八日

龍樹大師世にいでて 難行易行のみちおしえ
流転輪廻のわれらをば 弘誓のふねにのせたまう

本師龍樹菩薩の おしえをつたえきかんひと

本願ころにかけしめて つねに弥陀を称すべし

毎月十九日

本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしえにて
仙経ながくやきすてて 浄土にふかく帰せしめき

本願円頓一乗は 逆悪損すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくときとらしむ

毎月二十日

如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ
難値難見とときたまひ 猶霊瑞華としめしける

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも ひさしき仏とみえたまう

毎月二十一日

弥陀の名号となえつつ 信心まことにするひとは
憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもいあり

誓願不思議をつたがい 御名を称する往生は

宮殿のうちに五百歳 むなしくすぐとぞときたまう

毎月二十二日（印は報恩講の時三首）

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまえり
法身の光輪きわもなく 世の盲冥をてらすなり

知恵の光明はかりなし 有量の諸相ことごとく

（高僧〓龍樹）

（高僧〓曇鸞）

（浄土〓大経）

（浄土〓冠頭）

光暁かぶらぬものはなし 真実明に帰命せよ

解説の光輪きわもなし 光触かぶるものはみな
有無をはなるとのべたまう 平等覺に帰命せよ

毎月二十三日

恩徳広大釈迦如来 偉提夫人に勅してぞ

光台現国のそのなかに 安樂世界をえらばしむ

大聖おのおのもろともに 凡愚底下のつみひとを

逆悪もらさぬ誓願に 方便引入せしめけり

毎月二十四日（印は報恩講の時三首）

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし
撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる

恒沙塵数の如来は 万行の少善をきらいつつ

名号不思議の信心を ひとしくひとえにすすめたり

十方恒沙の諸仏 極難信ののりをとき

五濁悪世のためにとて 証誠護念せしめたり

毎月二十五日（印は報恩講の時のみ）

天親論主は一心に 無碍光に帰命す

本願力に乗すれば 報土にいたるとのべたまう

尽十方の無碍光仏 一心に帰命するをこそ

天親論主のみことには 願作仏心とのべたまう

願作仏の心はこれ 度衆生のころなり

度衆生の心はこれ 利他真実の信心なり

毎月二十六日（印は報恩講の時のみ）

大心海より化してこそ 善導和尚とおわけけれ
末代濁世のためにとて 十方諸仏に証をこう

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば

（浄土〓讚阿弥陀）

（浄土〓觀經）

（浄土〓阿弥陀）

（高僧〓天親）

大小聖人みなながら 如来の弘誓の乗ずなり
煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば
すなわち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ
(高僧〓善導)

毎月二十七日(印は報恩講の時のみ)

本師源信(聖人)ねんごろに 一代仏教そのなかに
念仏一門ひらきてぞ 濁世末代おしえける
弥陀の報土をねがうひと 外儀のすがたはことなりと
本願名号信受して 寤寐にわすることなかれ
極悪深重の衆生は 他の方便さらになし
ひとへに弥陀を称してぞ 浄土にうまるとのべたまふ
(高僧〓源信)

毎月二十八日(本日は三首)

本師聖人世にいでて 弘願の一乗ひろめつつ
日本一州ことごとく 浄土の機縁あらわれぬ
智慧光のちからより 本師聖人あらわれて
浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ
曠劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき
本師聖人いまずば このたびむなくすぎなまし
(高僧〓源空)

毎月二十九日

眞実信心うるゆえに すなわち定衆にいりぬれば
補処の弥勒菩薩おなじくて 無上覺をさとるなり
智慧の念仏つることは 法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし
(正像末〓三時)

毎月三十日

三塗苦難ながくとじ 旦有自然快樂音
このゆえ安樂となすけたり 無極尊に歸命せよ
十方三世の無量慧 おなじく一如に乗じてぞ

二智円満道平等 摂化隨縁不思議なり
(浄土〓讚阿弥陀)

毎月三十一日

和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし
一心に歸命したてまつり 奉讚不退ならしめよ
上宮皇子方便し 和国の有情をあはれみて
如来の悲願を弘宣せり 慶喜奉讚せしむべし
(正像末〓聖徳讚)

煤払い、除夜会(一二月三十一日)

善光寺の如来の われらをあわれみまして
なにわのうらにきたります 御ん名もしらぬ守屋にて
そのときほとおりけとぞまふしける 疫れいあるひはこのゆえと
守屋がたくひはみなともに ほとおりけとぞまふしける

修正会(吉月一日)

阿弥陀如来来化して 息災延命のためにとて
金光明の寿量品 ときおきたまえるみのりなり
山家の伝教大師は 国土人民をあわれみて
七難消滅の誦文には 南無阿弥陀仏をとなうべし
(浄土〓現世利益)

御代日中(一月二三日、五月二日、八月一三日) (毎月二日)

如来の興世あひがたあく 諸仏の経道ききがたし
菩薩の勝法きくことも 無量こうにもまれらまり
善知識にあふことも おしふることもまたかたし
よくきくこともかたければ 行ずることもなほかたし

一代諸教の信よりも 弘願の信樂なほかたし
難中之難とときたまひ 無過斯難とのべたまふ
(浄土〓大經)

臨時に使用するもの

仏智の不思議をうたがひて 自力の称念このむゆえ

辺地懈慢にとどまりて 仏恩報ずるところなし

仏智つたがつつみふかし この心おもいしるならば

くゆるところをむねとして 仏智の不思議をたのむべし

(正像末ニ戒疑)